

亡き母が闘病中に描いた絵日記

いじめ防止
勇気と希望を

いじめを防ぐために学校で朗読活動をしている作家のヒロコ・ムトーさん(左)＝横浜市港北区、本名、相沢絵子＝は、二〇〇六年に亡くなった母が闘病中に描いた絵日記をまとめた「雲日記」(海竜社)を出版した。大腸がんや緑内障など、複数の病気をかかっても前向きに生きて母の姿を紹介することで、「心の持ちようまで幸せを感じるようになる」と、学校で読み聞かせるつもりだ。

(志村彰太)

作家のヒロコ・ムトーさん出版



ヒロコ・ムトーさん

ムトーさんの母・武の時、緑内障で右目のなどを相次いで患い、藤正さんは十九歳視力を失った。左目も入退院を繰り返して九白内障だったが、翌年十三歳で世界しだにバステル画を習い始め、七十六歳で初個展を開くまでに上達し、紙人形づくりを趣味と

かしその十年後、闘病一年前にはフランスのパリ日本文化会館で招待展を開いた。ムトーさんは、正字さんの遺品を整理した際、四十九枚のはがきに描かれた絵日記を見つけた。そこで初めて、母が自毛療養していた一九九一～二〇〇年の通算約六カ月



闘病中に絵日記を描き続けた武藤正字さん(左)・ヒロコ・ムトーさん(右)親供

で、夕焼けが描かれていたが、それぞれが全く違う色使いだっただけで、同じ西側の窓から見える同じような空でも、正字さんの目には毎日違っていた。これから毎日夏の空が描ける楽しみを感じてきたことを知った。絵日記は主に水彩画

ヒロコ・ムトーさんの母・正字さんが闘病中に描いた絵日記がまとめられた「雲日記」



向きな言葉がつづられていた。はがきに描かれていた絵日記は、残されたムトーさんに向けた手紙のように思えた。

「この日記は、勇気と希望を与えてくれる」と感じ、二十五枚を選んで出版を決めた。ムトーさんは米国留学の経験があり、二人の娘は帰国後、「英語が話せる」などの理由でいじめに遭ったことがある。〇七年から、いじめを乗り越えた娘や、母を描いた自著二冊を小中学校で読み聞かせる活動「心の宅急便」を始めた。

「いじめはダメ」と直接訴えるのではなく、「人は何をされたら傷つくのか」を気づいてもらうのが目的。ハーブの音読に乗せて家族愛や友情の大切さを伝える。

雲日記は新編サインズで二十四頁。ムトーさんの解説も添えた。ムトーさんは「これを読めば、苦しんでいる人も『自分は描けたもんじやない』と思えるはず」と話している。

学校で読み聞かせたい